

## 大学放浪記 (6)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

前報でコンケン大学からマエジョ大学に移籍した事は既述した。本報ではマエジョ大学での受け入れ、処遇について記す。ここで断っておきたいことは先の大学と移籍後の大学との比較を為てどちらが良かったかどうかなどと言ったことを述べるつもりはない。単にこのような対応であったと言う事実を記して、その様な大学の対応もあるのかと言うことを情報提供として紹介し、有益に参考、あるいは利用頂ければ幸である。雇用側の大学に為てもそれなりの思いや、予算的準備や対応、然るべき仕事の内容とその量など、その時点での状況が異なるので一概に。その評価を述べるつもりはない。しかし状況がどのようであったかと言う状況は記しておきたい。これまでも幾度か既述したが、基本的にタイの大学での外国人の雇用はその契約期間が1年間であること、更なる延長は雇用側の大学が、再契約、または契約延長を必要と考えるかどうかにかかっている。その内容が1年間の契約内容のどの程度を被雇用側が遂行、達成したかと言う評価、雇用に対する予算的余裕があるかどうか、雇用側にとっての効果、利益など、種々の条件を考慮して最終的な結果が示される。如何なる理由であっても基本的に雇用側の意向が全てを決める。極端に言えば、雇用側が気に入らなければ何もせず放置して1年間の契約期間が来れば自動的に解雇になるから痛くもかゆくもない。雇用側と被雇用側の立場の違いは大きく、被雇用側が不満で有ろうとなかろうと、殆ど関係はない。被雇用側の立場が弱いことは一般的で有り、特に外国人の雇用には明らかにその差は大きい。

1年間の滞在、契約期間中にどの程度を遂行できたかと言うと、筆者自身の評価では60%程度くらいであろうか。言い訳にも成らないが、運も大きく影響する。コロナ禍の影響はその中でも大きく、実質身動きができない状況が長期に亘り続き、新規国際交流事業拡大のための行動を起こしようにも、特に国際交流に関する交渉事には相手（機関）もあり、こちらが良くても相手が同意せねば話にならない。また相手機関にその意思があっても如何に交渉を進めるかと言うことになると、実質相手機関を訪れることは、コロナ禍では物理的にできず、結果の評価としては未達成と言う事になる。実質相手機関を訪問しての対面行動は皆無で進めなければならず、このことは実質不可能と言う事になる。学生もロックダウンで自宅待機、授業は全てがオンライン、教員もテレワークで殆ど顔を合わせる事は出来ない。と言うわけで、1年間の滞在期間中教員にも学生にも殆ど会うこともなければ、新しい出会いすらなかった。こちらから会いに出かけようにも、目指す相手が何処に居るかも分からない。よほどの緊急、必要性がなければ物理的に「対面で会う」事は無かった。ひたすらアパートと大学のオフィスを毎日往復する生活で、オフィスに居ても訪問客が来る訳でもない。オフィスでも一人寂しく仕事をする以外に無い。運動不足で

身体の調子もおかしくなる。それを避ける為にアパートと大学のオフィスの往復は徒歩にし、雨が降っても降らなくても、また「週末の土日や休日、祝日にも休まず、せっせと通い、食事と運動により健康状況のバランスを維持する事に気を配った。1年間で達成した事項を要約すれば次のようになる。

1) 学部生への特別講義 (PPT, Powerpoint を用いた 1.5 時間余の英語でのオンライン講義) Title of Topic: Work preparation & Continuing Self - Development, Learning Skill Development (for Undergraduate level)

2) 大学院生への特別講義 (PPT, Powerpoint を用いた 1.5 時間余の英語でのオンライン講義) Title of Topic: Engineering Research Methodology (for Graduate level)

3) タイ国農業工学会で論文発表 (グッド・プレゼン賞受賞)

4) スペインでの国際学会で基調講演 (ベスト・論文賞受賞)

その他の達成すべき項目、すなわち学生・院生の英文論文閲読 (20 編以上)、国際協力プロジェクト提案 2 件以上、と言う TOR (Terms of Reference) は、上記の様にコロナ禍という状況の下で未達成となった。契約期間を 3 ヶ月残した時点で中間報告を行ったが、契約延長という話にはならなかった。単純に見れば、契約事項の未達成、さらにコロナ禍の終息見通しへの不透明さ、などから雇用契約を延長しても状況は改善しないと言う相手大学側の判断、あるいは大学としての雇用への必要性和予算的余裕への判断など総合的な見地から筆者が期待する状況にはほど遠いと判断し、これ以上迷惑を掛けてはいけな、と判断し辞職を決断した。

その後、どうするかと言う判断は速くしないといけな。職探しには 5、6 ヶ月ほど必要であり、いろいろな手続きが待ち受けていることはこれまでの経験から容易に予想できる。かといって自分一人で何もかもできる可能性は殆ど無い。然るべき人が中に入って紹介、推薦などにおいて尽力して貰わないと不可能に近い。紹介頂き、雇用側が受け入れしてくれるなら、文句を言わず何処にでも行くという覚悟はできている。なぜなら契約に於ける条件などは全く眼中にはない。ただ働く場所があればそれだけで感謝すべきであると考えている。院生時代の恩師の言葉に、「報酬を貰って好きな仕事が自由にできるなんて、こんなに贅沢な話はない、もっと有り難いと感謝すべきである」と言われたのを鮮明に記憶している。一度本職を定年退職した身で有り、これ以上金を儲ける必要も無い。心底、無我無欲で貢献できるならそれで良いし、またそうすべきであると考えて居る。だから条件は付けないし、働く事が出来ることに執着する。幸いにも受け入れを表明して頂いたマエジヨ大学にはその意味で大変感謝して居る。また知らない人が居ないわけではない。チェンマイ大学に勤務している時にも 1 学期間、週に一度この大学に通い、院生の英文論文、プレゼン指導を担ったこともある。また同大学の主催する国際学会で発表しジャーナルにも投稿し、いくらかの教員とは顔馴染みの人も少なくはない。しかしそれと就職とは別問題である。でも知らない人が居ないよりは居る方が良い。ましてや採用後には一緒に仕事ができると言う点では、必要な事項の一つである。コロナ禍が始まる 2019 年末以前には

この大学での再生可能エネルギー国際学会では2度に亘り、基調講演者として招待され、その役を果たした事がある。その2回目の会議の後半に知り合った人が学長のポストに居る。しかし知り会ったと言っても一度会い、名刺交換し、明日会う約束を為て別れたが、翌日その人は急用ができたのか顔を見せず会えなかった。このように顧みると。かれこれ4年か5年会っていない事になる。前雇用先での契約期限とビザの有効期限が一緒に、一度退職して次の職場での雇用、受け入れに移る手続きをしなければならず、迷惑を掛けた。にもかかわらずマエジョ大学側では既に始まっていたプロジェクトのコンサルタントという身分を作り、一時的にビザの更新をつなげる処置をして頂いた。その上報酬（給料）まで手当てして頂いた。身に余る光栄である。その後2ヶ月をかけて正式な雇用手続きを為て頂いて居る。指示されるがままに必要な書類を揃え、雇用条件や仕事の内容についても全面的に一任という形で事は進んでいる。有り難い話である。そのコンサルタントという身分も切れて、新しく正式に再生可能エネルギー学部の教員（講師）としての身分が認可された。10月初めに前機関（大学）から移籍して一時的とは言え、頂いたオフィスは学長室の隣の副学長室で、15名ほどの事務職員が詰めている。そのオフィスの奥まった一室が与えられた部屋である。英語でのコミュニケーションができる中年女性がチーフ（主任）で、辛いところに手が届く様な対応で世話してくれる。彼女の部下にあたる職員もこれでもかと言わんばかりの協力体制と気配りで友好的に対応してくれる。例えば、昼食についてもどのメニューが良いかを尋ねて注文し、コロナ禍であるためデリバリーで注文する。その女性チーフの話では、客員教授の言われることを良く聞き対応せよ、トイレに行っても、廊下を歩いていても、貌を合わせたら黙って通るな、必ず挨拶をせよ、と言う通達が上から出ていると聞いて驚いた。いわゆるスタッフ・デベロップメント（Staff Development、職員研修）が行き届いて居る。では教員研修（Faculty Development）についてはどうかと言われると若干答えにくい部分もある。しかし今の筆者は言いにくいこともずばずば言うようにしている。幸い学長先生は他に類を見ないほど友好的でメールにも直接返事を頂ける。キャンパスを歩いていて相手が構内の電動車で移動中は姿が見えるので、気軽に手を振り声を掛けて下さる。こうした事が出来る人が「長」のポストに座ることを筆者は強調してきたが、まさにその良き例を見ているようである。

タイでは日本の文化に似て、お中元やお歳暮を届ける習慣がある。もちろんそれなりにお世話になったという事への区切りとしての謝意の表現である。そのポストに座っている人なら誰でもと言うわけではない。言うまでも無くお世話になったという謝意があればこそその具体的表現の行為であるが。誰を差し置いてもあの人だけには、謝意を伝えたいと言う気持ちを起こさせるパーソナリティを持ち合わせた人である。採用依頼3ヶ月ほどで有るが、その受け入れに於ける対応、具体的行為には言い表せない気配り（Mindfulness）が溢れている。そうした意味で心ばかりの物を差し上げておいたが、年が明けて出勤の初日（1月4日）に事務職員を従えて筆者の部屋を訪れた学長を見てびっくりした。学長本人その人である。筆者への挨拶代わりに贈物（プレゼント）への謝意の表示とともに「お返し」

を頂いた。驚きである。大学の「長」が1外国人教員にわざわざ直接オフィスに出向いて新年の挨拶を兼ね、心こもるギフトと謝意を表すために出向くと言う行為はポストが高ければ高く成る程、なかなかできないことである。タイの文化である敬老の精神 (Seniority) であると言え、それはそうかも知れないが、高位の人であればあるほど、実際に行動に表すことは稀である。そこに計り知れない人間性、尊敬の念を抱かずにはおられない。こうした「行動で示す」行為が大学を「希望の持てる大学 (Hopeful university) へと押し上げ、いつの間にかランキングをも高める事につながるのである。いわゆる高位の人がどのレベルで物事を見ているか、その「視座」が大学の評価、レベル、質的ランキングを決める事につながる。

筆者は在職時代から海外留学生の受け入れに関して、その全ての手続きは自分でやっていた。理由はいろいろあるが、自分でやった方が速い、入国管理局などに直接足を運ぶ事は多くの待ち時間を費やし、無駄に思える所もあるが、自身の勉強にもなる。国際交流のプロと言うレベルでなくとも、少なくとも留学生の受け入れを担う限りにおいては知っておかねばならない事であると言う論理である。受け入れ留学生の来日に関しては必ず空港までの送迎を実施してきたし、来日する留学生にも「指導教員自ら迎えに来てくれた」と言う感動も、「他人には親切に下さい」と言う教育の一つである。自ら良いと思う音を実践して見せる姿勢を筆者は重視、堅持している。筆者と学長では比較にならないが、身分が高ければ高いほど自ら実践して見せることは難しいし、恥ずかしいと思う人が居ても不思議ではない。積極的に率先して「自ら行動する人」が感動と尊敬を集めるのは至極自然であり、今の世の中ではそうした人が少なすぎる。何かと言うと「拝金」が優先思考であることに筆者は失望している。



農学関係部署所有の圃場での牛の放牧



キャンパス内を流れる水路